

改教時報

第十二號

明治三十三年十一月一日

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を奨励し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、政教問題を研究して、政府をして公認教制度を立てしむる事。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奨励して、善良なる家庭を形作りしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を斷絶する事。
- 十一、殖民傳道を奨励する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を尊く

目次

社説

●現時の宗教制度問題は征韓論當時の對外問題に同じ

論説

●餘裕なき文部當路者

在大學 和田 鼎

社會

●第十四議會 ●雲照律師と自白僧園 ●本願寺派新法主 ●分派獨立の流行 ●學校系統問題 ●教育基金及國庫補助 ●教育俱樂部 ●學者に寄語 ●哲學雜誌記者の實際論 ●雜俎

雜錄

●西藏通信

在清國 能海 寬

信界

●靜觀錄——(十五)

信念の修養は實際問題に如くなし 文學士 近角 常觀

令音

●奧村五百子傳 (六)

文學士 秦敏之

會報

●大日本佛教青年會秋季大會 ●德風會 ●道交會 ●樹德會 ●四恩瓜生會 ●播州播州と公認 ●加賀大谷派北陸聯合會 ●能登同國佛教徒同盟會

演說會

政 教 時 報

現時の宗教制度問題は征韓論當時の對外問題に同ト

國民は未だ圓熟せる宗教思想發達せず、從て宗教と國家との關係問題を解釋するの能力なし、然るに今や時勢は國民を驅りて宗教制度を確立すべき時機に接せしむ、而して宗教制度は正に國家と宗教との關係を規定すべき者、恰も幼少なる戸主が一家の整理をなさざるべからざるが如き感あるを覺ふ宜なる哉輿論紛々擾々として其適歸する所を知らざるや、蓋し之を國家の側よりみるも宗教の側よりみるも不幸之より大なるはなし、吾人は情々其境遇を察するに征韓論當時の對外問題を想起せずばならず、

王政維新の大業成就して、日本帝國は嚴然として、萬國對峙の間に起つや忽ち對外問題を處理すべき運に達せり、當時内治の問題未だ整頓せずして、猶血氣の士腕を鳴らして事あらむことを冀ふ、老西郷翁、以爲らく、今や大日本帝國は世界の舞臺に上りて、列國と馳聘せざるべからず、須らく泰西諸國深く東洋問題に着手せざるに當りて、先づ征韓の師を起し、一は皇威を八紘に耀し、一は他日必ず避くべからざる東洋問題に於て機先を制すべし、内治固より急なりと雖、徐ろに整頓せば事易々たるのみ、且つ維新戰爭に於て猶奮勃として發

洩し盡さる血氣を以て之を半島に爆發せしむ、却て是れ内治を圓滑ならしむる所以なりと、乃ち斷々乎として征韓論を骨張す、今にして之を想ふ、洵に氣宇六合を併呑せるの概なくひばならず、聞説らく當時翁の廟堂に於て全力を傾注して、滿腔の經綸を吐露するや暗啞叱咤恰も虎の觸を負て天風を呼び來るか如きものあり、三條公席に在り、憂心忡々として遂に卒倒するに至れりと、翁其議の終に容れられざるを見、翻然議を建てし曰く然らば請ふ北海道を以て我に委任せよ、我同志を率ゐて之が開拓に従事し、以て北門の鎖鑰に當らむと何ぞ其志の皎々として雪よりも白きや、廟議亦之を容れず、乃ち悠然起て故山に歸臥す、吾人は之を想起する毎に、翁の志を悲まずばならず、其後果して僅かに臺灣征伐の噴火口を開きて醜物の氣を洩さしめ、現時の西郷翁をして其衝に當らしむるの止むを得ざるに至れり、而して噴火口は小にして未だ醜物の氣を洩し盡すに足らず、遂に十年の役に於て内地に於て爆發をみるに至れり、而して對外問題に至りては姑息偷安全く放棄して翁の志を繼ぐものなく、列國は非常の速力を以て既に業に十分東洋問題に着手し、進退谷るの域に達して果然二十七八年戰役の避くべからざるに至れり、然れども時機既に後れたり、故に此の如き大戦を起し、此の如き大捷を得て、猶現時國勢の蹙縮を來す、吾人は當時を追憶して、翁が眼光の非凡なりしを驚嘆せずばならず、

吾人は現時の宗教制度確立の問題を以て、當時の對外問題と趣を同じくするものなることを論斷せむとす、夫れ宗教は其

本體よりみれば固より人類全体に普偏なるもの、其性質世界的なるは論を待たずと雖、苟も宗派として一の組織を有し、一の團體を立つる上に於ては必ずや其團體所屬の國家なるものと親密の關係を有せざるべからず、吾人は飽迄も宗教の本體と國家との關係を論ずるの頗る非理に陥り安きを認む例せば博愛主義なるか故に國家と衝突すと云ひ、又平等主義なるか故に宗教團體は何れも同一に取扱ふべしと論ずるが如き是なり、然れども宗教が顯はれて宗派となり、團體となれる已上に於ては、其宗義となり、又儀式となり、又團體の經濟となり必ず所屬の國家なるものと至大の關係を有するものなり、是れ宗教が社會現象の一として活動界に存する已上は免るべからざる數なり、請ふ看よ宗教の本體として佛敎は平等の慈悲を説き、基督教は博愛を説くと雖、苟も宗派として傳道に従事せる已上は宗義及組織を初めとして、日本の佛敎諸宗派は日本的となり、希臘教會は露國的となり、英國教會は英國的となり、米のメソジスト教會の如きは米國的となり、獨逸の新敎は獨逸的にして佛の舊敎は佛國的なるにあらざるや、而して此等の諸宗派は雜然として日本内地に於て其教域を争はむとす、實に是精神界に於ける對外問題を處理すべきの時、恰も征韓論當時に於ける國勢問題と其位置を同じくするにあらずや、蓋し國勢問題は有形上に顯はるるもの、何人と雖目睹するに難からず、獨り宗教の問題に至りては無形精神の上は其宗義及儀式の勢力如何を知るべからざる者、而して現時

の日本國民中特に活動界に立てるものゝ如き未だ圓熟せる宗教思想を有せず、爲めに單に宗教なる名目の下に之を同一視して、其團體の如何によりて教義及儀式の點に於て如何に國家と親密なる關係を有するかを看破する能はざるは洵に痛嘆に堪はざるなり、而して此の如く宗教に於て幼稚なる頭腦を有する國民は今や正に正面の問題たる宗教制度を確立すべき時機に迫れり、豈炭々乎として危からざるや、特に最も注意すべきは團體の經濟問題なりとす、看よ日本現時の基督教なるもの唯同一基督教と稱する上に於ては其本國との關係を見難しと雖、其宗派の區別を見て其教義と儀式とを取調べ、進みて其團體の組織と其維持の經濟を檢し來らば、所謂世界的の基督教の如きは唯空名に過ぎざるを悟らむ、基督教の名の下に支那近海に軍艦の出沒するの般艦を顧みば、如何に宗教團體なるものは國家と關係の至大なるを知るを得む、吾人固より日本現時の基督教會の萎靡不振はすして深く憂ふるに足らざるを知ると雖、此等の制度問題を決定し去る、却て列國教會の深く手を日本に下さざる今日に於て斷行するの好時機たるを信ず、若し他の外國的團體の擴張して、日本内地に延長せるものを以て、恰も日本内地に於て獨立せる團體の看をなし、萬一にも同一取扱の規定を設けて、姑息偷安の計を講せば、他日必ず一大爆裂の止むべからざる時機に達せむ、誰か快刀亂麻を斷つ底の手腕を揮て、一大英斷を下し、日本精神界を統一する百年の大計を立つるものぞ、吾人は老西郷の襟度を追慕すると共に、現時の内務大臣西郷侯か眞摯の態度を以て此

大問題を處理せむことを勸告するものなり。世人或は今日所謂政教論者の分子頗る難駁なるの觀あるを以て、徒らに排外思想を鼓舞する頑固論となし、又寧ろ日本宗教内部を刷新するの急を叫ぶものあり、固より一理あるの言なりと雖、最も深く注意を要すべき點なりとす、看よ征韓論の起るや老西郷翁已下有眼の士は其眼孔の高き畏るべきものありと雖、當時之を賛成せる論者中には他の血氣の士を包容せるが爲め、恰も攘夷思想を以て目せられたるに非ずや、又日本宗教内部の刷新を來たし國民の宗教心を呼び起せざる前に於て此等の問題に到達せざるは慥に世の活動者流か宗教問題を以て對岸の火災視する所以なりと雖、目今動搖せる分子は何れも眞摯に宗教と國家とを愛ひて奮起せるもの、此際に當りて當局者は確然として宗教制度を立て、團體の區別を明にし、日本の宗教として當然盡すべき宗教的事業を以て彼等に任せば、却て彼の鬱勃たる氣概を社會的事業の上に顯はさしむを得、又一氣呵成の勢を以て内部刷新の實を擧げしむるを得む、吾人亦新しき一道の光明前途に赫奕たるを認むる者必ずや社會改善の道を講じて日本宗教を復活せしめむと欲す、若し當路者にして征韓論當時の如く、現今動搖せる分子を鎮壓するをのみ事とせば、勢の激する所宗教對外問題の爲めに鬱積せる氣概は、却て意外の點に向て爆發するに至らむ、若し此の如き結果に至らば國家よりみるも宗教よりみるも一大恨事たらざるを得ず、吾人は世の政教論者が秩序ある運動によりて其目的を達する事を勸告すると共に、當局者が大勢

を統御する上に於て其方針を誤らざらむことを切言するものなり。終りに臨み一言す、世の宗教制度を論するもの、宗教の本體より立論するの不可なるを斷言すると共に、日本に於ける基督敎徒か外國的關係の點に深く注意せむとを痛言す、昨年監獄問題の當時外國公使の手を借りて運動を試みたりしは當時吾人をして益々決心を固くせしめたりし所以、而して近時宗教教育分離問題につきて同一の手段を試みたりと傳ふ、吾人は問題と目的の如何を問はず其手段の卑劣隱微なるを痛嘆せずむはならず、若し彼等にして此等の手段を反覆せむか、國民をして益々激昂せしめ遂に不測の禍を招かむ吾人は正理を以て争はむとするもの乃ち一言之に及ぶ。

論説

餘裕なき文部當路者 和田鼎

吾人をして忌憚なく思ふ所を言はしめは政治界と言はず教育界と言はず實業界といはず將た宗教界と言はず凡て所有社會を通じて毫も餘裕なきなり極言せば其日暮しの窮民が明日の糧を思ふに遑なきが如きなり是れ一は急激なる新文明の輸入に伴ふ必然の現象にして諸般の事未だ調和の歩武を探るに遑なきの致す所なりと雖も抑もまた小國民の狹量も亦其主因の一たらすんばあらず既に餘裕なく既に其日に追はる何んぞ能く百年の大計を豫定して適確なる方針を樹立するを得んや政界の事吾人は之を論するの資格なきを以て今茲に其實例を

擧げて之を非議するの閑日月なしと雖も少しく政界の動靜に注目せば過去十年の事實は明かに之を證して餘あらんなり實業界の事教育界の事悉く皆其軌を一にするは亦争ふ可らざるの事實なり吾人はこの國民に與ふるに餘裕なき國民の名を以てするに躊躇せざるなり

政教問題の如きは這般の事實を證明するに於て寔に好箇の適例にあらざるや彼の監獄問題の破裂は疑もなく當路者の鼓膜を振動せしめし青天の霹靂なりしなり何となれば彼等は早晩將に起らざるを得ざる政教關係の問題に就きては毫も其頭腦を煩はしたる事なければなり世論漸く露をたるに及びて茲に初めて周章狼狽を極め調査委員を設け取調掛を置き急に外國の事例を研究して以て一時を誤認せんと力むるが如きは抑々何等の醜態何等の耻狀を斯の如くにして得たるところ奚んぞ以て十年の後を規定する事を得ん畢竟是れ一時逃れの窮策に過ぎざるなり之に向て餘裕なきといふ言ふもの、非なるか抑もまた言はるゝもの、是なるか識者を俟たずして知らんのみ翻て思を宗教界の現状に馳す吾人亦全一の歎に打たれざる能はず思ふに現時の宗教界研究すべく慮るべきもの寔に一二にして足らず宗教の根底たる信仰確立の如き其形に顯はれたる諸種の社會問題の如き非宗教的の當事者に對する政教問題の如きは果して眞摯なる研究確實なる調査の行はるゝものありや彼の信仰問題の如きは徒らに嘔吐し漫りに筆先の議論を爲して得らるべきものに非ず要は眞面目なる心靈の靜養にありて存す吾人は彼の徒らに燃るが如き信仰、熱誠、等の言辭

を漫用して他を嘗るもの、却て氷の如く冷かなるを哀むものなり彼の慈善の如き社會問題の弊のみ大にして其實の稀少なるは慈善と施與とを同一の意味なりと誤解して未だ其方法と性質とを詳かにせざるの致すところ將たまた同情の涙に乏しきも又其主因たらずんばあらず彼の一派の論者が信仰の上に立ざる慈善を目して偽善の甚しきものと速断し去りたるが如きも吾人の少しく解し難きところ吾人の見る所を以てすれば慈善は眞面目なる同情に過ぎざればなり濶腔の同情に、自己を忘れたる、やがて是れ慈善の源泉に外ならざればなり、彼の政教問題の如き確實なる研究に欠くるものあるは亦争ふ可らざる所なりと雖も直ちに是を以て政治に諛ふるものとなし卑窳なるものとなし頗迷なるものとなすが如きも亦一の短見者流に過ぎざるなり吾人は只其當に然らざる可らずして然も尙然らざるものあるを見て之を然らしめんと欲するに過ぎざるなり吾人は國家と宗教との關係を研究し諸種の制度に考へて茲に公認敎制度の最も至當なるを信するを以て之を主張するに過ぎざるなり吾人は腐敗したる敎界に向て殊別の特權を與へんことを欲するにも非ず墮落したる僧徒に向て過大の恩遇を與へんにも非ず是等の腐敗墮落は元より其洗滌の一日も急なるを信す然りと雖も世の公認敎を非議するもの單に現時の腐敗に重きを置き一時的の議論を爲すに過ぎず吾人の言ふ所は即ち然く一時的のものに非ず是によりて兩者の關係を永く將來の上に規定せんと欲するにあるのみ吾人更に言はんと欲するは一の止むを得ざるプロセスにして、宗教の

エンドに非ざると、之を要するに是等諸種の問題は充分の餘裕を以て精確眞摯なる研究を爲さざる可らざるもの斷じて一時の思付き論を許さざるなり而して是等の問題に關してはたとひ實際の上に於て未だ著しき効果の顯はれたるを見ずと雖も若々其研察に従事せられつゝあるは疑を容れざる所吾人は最晩然たる靈光に浴するの日あるを豫期するに憚らざるなり而して吾人は是等緊要なる諸問題の外尙一の最も切要なる研究問題の存するものあるを信す殊に現今の形勢に見て益々其研究の焦眉の急に迫るものあるを絶叫せずんばあらず見よ宗教は將に教育の足下に蹂躪せられんとするの傾向あるに非ずや吾人は宗教と教育との關係を研察査定して以て一方には宗教教育の基礎を確立しそが國家教育と如何の關係に立つべきものなりやを研究するの急務なるを主張せんと欲す、敢て問ふ吾國の佛敎學校中よく宗教教育の實を擧げたるものありや科學と宗教との調和の如きは木に竹したるの奇觀なきか國民教育は日々兒童の信仰を破壊しつゝあるなきか既に其研究の緊要なるを見る須らく先づ是に向て其研究の方法を定め確固たる理論と適切なる事實の下に不動の斷案を免めざる可らず而して劈頭來るべきは二個の問題あり曰く宗教と教育とは全然離隔獨立せしむべきものなりや是一なり宗教と教育とは互に調和融合せしむべきものなりや是れ二なり這般二個の問題を研めんと欲すに當りて尙一の先決すべきものあり即ち二者は本質的に全然相反するものなりや將た一部分相容るゝものなりや或は全く相容れざるものなりやの問題

是なり畢竟二の問題にして鮮明ならざる以上は徒らに二者の關係を論ずるにのみならず遂に架空の論に終りその調和説を取ると分離説を採るとに論なく共に根底なき空想論に過ぎざるなり是等の問題や極めて重大の事に屬す豈に輕々に論じ去るべき底の問題ならんや須らく慎重の態度によりて眞摯なる研究を熟ざる可らず吾人は是を綜括してこゝに二種の方法を擧ぐるの適當なるを信す曰く理論的研究曰く歴史的研究是なり蓋しては單に該問題の關係を明瞭ならしむるに欲く可らざるの要件たるのみならず科學的研究一般の定則なればなりされど吾人は今茲にこの研究によりて得たる結果を表白して以て世の識者に正さんとには非ずと他日精査研察の餘に譲り今は只該問題研究の必要なるを警告し并せて餘裕なき教育當路者の一時的松繚算談の下に輕々しくこの問題を決せんとするが如きの傾あるを見て一般の反省を促かさんと欲するに止まるのみ蓋し吾人はこの問題の今後尙一層の大問題となるべきを豫想するを以て輕燥なる斷案を下すの危險なるを慮ればなり文部省の無能なるは最早争ふ可らざるの事實となれり彼の八年計畫の如きは殆んど文部攻撃者に向て一の嘲笑的材料を興へたるに過ぎざるもの其施爲するところ計畫する所概ね皆一時の急に應じ必要に迫られて案出するところなるを以て百年の大計の如きは言ふも更なり五年十年の後をだも期し難き一時的計畫に終り改變に改變を加へ殆んど被教育者をして五里霧中に彷徨せしめ總て教育の効果を稀少ならしむるもの比々皆是なり彼の大學増設問題の如き既設二大學の未だ甚だ

不完全の域にあり従て改善すべきもの太だ多きにも關らず更に之を増設して尙一層の不整備を加へんとするが如きは殆んど何の意たるを解する能はず吾人は現時に於ける文化の程度に考へて大學校數の夥多ならんより寧ろ其内容の整備したる少數の大學を有せん事を欲するものあり這般の設計や極言せば内を敗絮にして外を錦繡にせんと欲するものに外ならず他なし是れ單に入學生の員數の増加を見て打算し來りたる素人論に動されたるものなればなりまた彼の女子師範學校増設問題の如き未だ女子教育の根本的方針なく單に必要な聲に動かされて俄かに其形式的設備を定めんとするもの其組織方法の如き果してよく女子の品性として完全なる發達を遂げしめ從て第二の國民性を陶冶するに足るの資格を與ふるに適當るか女子教育制度調査は僅かに一二年前に着手せられたるなりと聞く若し果して然らば其効果の程度は豫め得て知るべきなりまた彼の中學制度の如きその二種の目的を有するにも關らず一の機關によりて之を熟げんとするもの二兎を逐ふもの遂に其一を得ざるは本より其所なり宜なり中學の數益多くして中等教育の實果得て見べきものなきや殊に吾人は中等教育に於ける倫理教育の無能なるに驚かずんばあらず彼か如くにして以て學生の徳性を涵養するに足れりと爲すか幾方の學生酒々相率ひて墮落の淵に沈淪するは豈に現時に於ける甚大の痛根事に非ずや吾人をして極言せしめば現時の倫理教育の如きは殆んど全く無意義の事に屬す人をして單に物を知らしむるは教育の目的に非ず人をして人たらしむるに於て始めて教育の

目的を達したりといふべきなり之を要するに文部當路者の計畫し施爲する所概ね一時の急に應じて不完全なる制度を規定するもの其將に來らんとする將來の問題に關して餘裕ある研究を熟げ其起るの日に於て確然たる方法を樹立するが如きは未だ當て之れなきなり教育といひ宗教といふ共に皆人心の上立てる眞面目の事業斷じて一時の誤謬主義を許さざるなり宗教と教育との關係は今や這箇當路者の手によりて料理せられんとす尙牛を割くに鋤刀を以てするともいふべきか危まざらんと欲するも豈に得んや私立學校令の如き這般の消息を露はして餘蘊なきもの其何の意味より規定せられたるやを知らずと雖も其宗教教育の上に與へたる打擊に至りては争ふ可らざるの事實なりとす該令の示すところによれば宗教學校は單に其宗教の儀式拜禮を行ひ宗教の教儀を教うるに於て學校としての凡ての特權を剝奪せらるゝものなり換言せば當路者は宗教學校の存在を認めざるものなり縱令其學校にして完全なる組織制度を有し幾百の學生を養育し凡ての點に於て普通の學校と異るとなきも一度宗教の臭味を加ふれば當然有すべき正當の權利は悉く剝去せらるゝ如きは何等背理の甚しきや當路者は宗教の講義又は儀式が學校として凡ての資格を抹殺すべく然く有害なりとなすか若し果して然らば何ぞ初より宗教を撲滅して之を根絶するに力めざる然らずんば特に宗教學校に向て之を虐待するの要何處にかある若し夫れ宗教學校の卒業生なるもの國民の一人として國家に對するの義務を盡す能はずといふか是れ又決して有り得べからざるの事なり是

に至りて吾人は一も正當なる理由の存するものあるを發見する事能はず庶莫吾人は該令につきて多くの辨を費さざるべし何となればこは單に宗教と教育との根本的關係問題の一部分なればなり當路者の宗教教育に對する見解如何は該令の發布によりて其尖頭を顯はしたるに相違なしと雖も吾人は根本の問題にして一度解せられんか他は自から其所を得べきを信ずるを以て寧ろ其根本問題の研究を必要とし江湖同感の士と共に確固たる根底の下に二者の關係を明瞭ならしめ秩序あり且つ實効ある宗教教育の系統とその基礎とを立てんと欲するものなり吾人は這箇重大の問題をして餘裕なき當路者の御都合政略中に委し去らしむるの極めて危険なるを思ふもの吾人豈に敢て無用の辯を好まんや誠に止むを得ざるものあればなり

社 會

●第十四議會 漸く近けり、今期議會はかの地租増徴案の如き入釜しき人氣問題は無く、三稅復舊、選舉干渉、鐵道國有論等は假令議場に現はるゝも、さして目覺しき事もあらざるべし、最大問題として目を惹くに足るは選舉法改正案、教育問題、宗教法案等なるべし、彼八年計畫の始末といひ、教育問題といひ、大學高等學校増設及各地方の引張合といひ、高等師範擴張問題といひ、文部省の仕事の多きと共に隨分不手際も少からねば必ず此問題には花々しき論戰あるべし、殊に貴族院議員中には既に此等の問題に付て熱心調査に従事せ

る向もありといへば、衆議院とて點視もせざるべければ必ず大混戰あるべし、宗教法案が亦一大波瀾を起さしむべきは昨年の巢鴨問題の景況より推すも明なり、教育問題といひ、宗教法案といひ、吾人は最注意を要す、全國の佛教徒も刮目して見るべし、注意を怠りて百年悔を殘す勿れ

●雲照律師と目白僧 喬木風に吹かるゝか近來釋雲照律師を云々する者生じたる如し、然れども律師が今世の得難きの傑僧にして、目白僧園が最勢力ある學佛の道場たる事は動すべからざる事實なり、然るに同律師は過般京都大本山仁和寺に晋山せられてより、同寺の別派獨立、及寛平法皇の御法要等の事に執掌せられ居り、目白僧園は全く他に譲り渡されし如き噂を聞き之を惜みしに、さは無く却て本山の事務は總て事務長等に一任して其身は依然目白に在りて、一宗の拘束を受けず、終世僧園の教化に盡瘁せらるべしと、東都佛教界の爲に賀すべし、

●本願寺派新法主 大谷光瑞師は、昨年清國を漫遊して大に見分を廣められしが、其前昨年十一月本願寺集會に於て會衆一同の建議を以て歐米巡遊の事を促し、も當時法主光尊師病中なりければ抄々しく決せざりしが其後輕快に赴きしを以て、清國を漫遊視察せられしが、今回又三年間歐米留學を計畫し、其準備も整頓せしを以て、愈來る十一月二十一日京都を出發して、征途に上らるゝといふ其計畫は四十萬圓の見込なりといふ、因に記す一派の法主にして海外に旅行せるは明治五年今の太谷派法主大谷光瑩師の歐米に巡遊せられしを

初とし、次は高田派新法主常盤井鶴松師が明治十七年より獨乙に留學して本年八月歸朝せられ今や、今回西派法嗣の留學せらるゝに至る、而に宗教の爲に賀すべし

◎分派獨立の流行

先般來洛東教王護國寺に於て眞言宗宗會の開會中なりしが、去月十八日突然宗典變更成案の建議案提出せられ咄嗟の間に多數を以て可決せられたり、又臨濟宗南禪寺末の遠州奥山方廣寺は本山に向て別派獨立の申請をなせりと、抑何たる怪事ぞや、蝸牛角上の小鬪争にアクセクとして、斯る倒行逆施を爲す僧侶諸師少しく眼を放て我宗派以外の社會を見よ、政黨は小黨分立の害を感じて益合同せんとし、十年以前に在りては片手に數へ切れぬ程何黨ぞか某派ぞか、ドンダリの丈比べを爲し、上に猶何黨にも屬せぬ中立議員の多かりしものを今日は全く三大黨に立ち分れて、一黨にて内閣組織の任にも當らんと待構へ居るにあらざるや、實業界を見よ、漸次に個人集り會社を作り、小會社合して大會社となり、以て今日の氣運に應せんとするにあらざるや、宗教社會惟り何の恃む所ありて此大勢に逆行せんとはするか、從來合併してすら何事をも仕出し得ざりし宗派にして、小本山が角突合したりとて何程の利益あり、何程の仕事を爲し得べしと考ふるにや、骨董品としては小さ可愛らしき品物も或は面白けれど、宗派の小さく本山の可愛らしきは褒めた者にもあらず、去れど世には合同を迂なりと嘲り、分立を賢なりと唱道する論者もあれば、少しく眞言宗が分立するに至りし動機を描き、披露せんか、新義派と古義派とは假令同じく眞言宗と稱

するも、其教義儀式共に差異多くして、實際上不便を感ずる點あること其一なり、七本山住職互に管長となる權利あり、其他皆同一權利なれども、中には幾千の末寺を有する智豊兩本山の如きあり、又末寺の數僅に十指を屈するに足らざる小寺あり、依て大寺の派に屬せる僧侶が馬鹿らしく感ずる事是其二なり、第三は言ふも耻しき、今日他宗派を見れば華嚴法相等の如き小宗派と雖も管長あり、執事あり、而して其管長も亦勅任官待遇を受く、然るに我本山は多數の末寺ありながら、合同して一宗を爲すを以て僅に一管長あるのみ若し分離せば、我等も獨立管長として勅任待遇を辱うするを得れば、一日も早く分離せざるべからずといふは是其第三なりと

◎學校系統問題

は教育上最大切なる案件の一なり、高等教育を受ける者にして此系統の不完全なる爲、二年三年を損する事は實際有勝の悲むべき現象なり、教育者たる者は慎重に研究すべきなり、今帝國教育會が調査したりと云ふ系統案を見るに、今日の實際と大なる差異も無けれど、今の中學校を高等國民學校、高等豫備學校の二種に分ち、又甲乙二種の實業學校を系統中に組入れし如きは、先吾人の意を得たるもの今全案を紹介せん

(一)國民學校(現今小學校) 入學者、年滿七歳の男女一修業年數、六箇年(義務教育)

(二)乙種實業學校 入學者、國民學校四年級修了者年滿十一歲一修業年數二箇年乃至三箇年

(三)高等國民學校(現今中學校) 入學者、國民義務教育を卒へたる者年滿十八

- (十五歲)一修學年數、五箇年
- (四)高等師範學校 入學者、同前一修學年數同前
- (五)甲種實業學校 入學者、同前一修學年數、三箇年乃至四箇年
- (六)女子高等國民學校(現今高等女學校) 入學者、同前一修學年數、四箇年
- (七)高等學校 一入學者、高等師範學校卒業者(年齡凡十八歲)及び國民高等學校卒業者にして入學試験に及ぶ者(同上)一修學年數、三箇年
- (八)師範學校 一入學者、高等師範學校及び高等國民學校の三年を修了せし者(年齡凡十六歲) 一修學年數、四箇年
- (九)女子師範學校 一入學者、女子高等國民學校二年修了者(年齡凡十五歲) 一修學年數三箇年
- (十)高等師範學校 一入學者、高等師範學校及び高等國民學校卒業者(年齡凡十八歲)及び師範學校三年修了者(年齡凡十九歲) 一修學年數、四箇年
- (十一)女子高等師範學校 一入學者、女子高等國民學校卒業者(年齡凡十七歲) 及女子師範學校卒業者(年齡凡十八歲) 一修學年數、三箇年
- (十二)高等專門學校(醫學、藥學、法律學、經濟學、理學等) 一入學者、高等師範學校卒業者(年齡凡十八歲)一修學年數、三箇年乃至四箇年
- (十三)高等實業學校(農學、工業、商業、商船) 一入學者、高等國民學校卒業者(年齡凡十八歲) 一修學年數、三箇年乃至四箇年
- (十四)分科大學 一入學者、高等學校卒業者(年齡凡二十一歲)一修學年數、三箇年乃至四箇年

◎教育基金及國庫補助

の發表は既に遠く以前にもあるべき筈なりしが、後れ々々て最早第十四議會開會開際となり、文部省も頻りに大藏省に交渉して此程漸く決定し閣議の首尾よく通過したれば不日發布せらるべし教育基金の金額は明年度分は凡そ四十萬圓程なりと小學校教育費國庫補助も少額にして、到底教育社會を満足せしむるに足らざるべしと

◎教育俱樂部

豫て帝國教育會内に教育俱樂部を新設せられしが去る十四日其發會式を同會樓上に開かれたり、當日來會者は朝野の教育家數十名にて、會長辻新次君教育俱樂部新設の趣旨を述べ次で久保田讓島田三郎二氏の演説ありたり同會の趣旨には予輩最賛成の意を表する者なれば左に趣意書

つぎ議論頗る肯綮にあたるものあるを以て之を左に抄録せん

(上等)政治と宗教との關係の如き宗教と教育との關係の如きは、蓋し國家が之に對して何等かの處置に出でざるべからざるものにして識者の平生熟慮し置くべき所決して或牧師一輩の事あるに及て始めて狼狽するが如きことあるべからざるなり、而して世の所謂政治家は果して能く此等の難問を解得たりとするか、現時歐洲に於て隆盛に向はんといふところのトビズム即ち舊教の一派の如き羅馬法皇教權の外は何等の君主權にも服従せずと云ふにあらざるや、内地雜居の後、信仰の自由を憲法によりて許され居る外國人は果して日本内治に於ける君主の統治權を衝突するとなしとするが舊教の行はる、歐西諸國は其主なるものを佛、伊、獨、露等となす、此等の諸國は政治上に於てその利害を異にし、一たび宗教上に於て教權と君主權との衝突ある場合の如き、彼等は聯合して我が東洋人種に當るとなしとするが、又耶穌教の教義は果して我日本國民を教育するに最も適せりとするか、○○會議の如きは外人をして日本國民を教育せしむるを得ざらしむるに決せりし雖も而も絶對的に彼等の教育に關するを拒むを得るか、○○事件の類の如きは往々起るとなしとするか、此等無形の現象は世俗政治家の未だ注意するに至らざる所に於て將來國民の中權を動搖せしむるに足る程の大問題なり、而して彼輩また之に向ふに暇あらず、凡そ如此類を列舉せば今日政治家に欠くる處の要案は屈指に暇あらざるべし、是れ元より維新前後に教育せられたる人士の頭腦の頑強なるより来る自然の結果にして深く待てるに足るべきも、今日以往の人士は特に大に發憤勵勵して從來の政治家に欠くる處の要案は必ず之を充たさる可らざる責任を有するものなり云々

◎雜俎

京都帝國大學圖書館にては閱覽所書庫等増築の上一般公衆閱覽の便に供せらるべしと傳ふ、公衛近衛家に於ては二條離宮の文庫を拜借して藏めありし累代保存の圖書二百四十四冊數凡そ一萬を同圖書館に寄贈せられたる由世間何ぞ此美舉に倣はざる、眞宗教導講習院學生職員は秋季遠足として宗祖の舊蹟を巡らんとて昨常總地方に出發せりと云ふ、大日本佛教青年會にては毎月二回宛有志の諸氏相會して信仰、經驗、談話會を開き大に信念の修養に力を盡さるゝと云ふ、常盤文學士今回東北青年合宿所を設立せんとす、其目的とする所は(一)遊學費を廉にして、父兄をして其子弟の教育を容易ならしめ(二)佛教によりて道念を修養し以て各自々治

を紹介すべし

教育俱樂部設立期意書
近時我國の教育は國運の隆昌と共に日進月歩の勢を呈し其施設經營の如きも亦漸く複雑に趨けり此際教育に志あるものは朝に在りて文政を行ふものと野にありて學制を講ずるものとを問はず一堂に相會し辯論を開き議論を把りて樂み常に氣脈を通ずるの設なかり可らず是れ我が帝國教育會内特に教育俱樂部を組織する所以なり若し夫れ此設備あるに因りて遠近の者來會し朝野の者相交り都鄙の情實野の意常に能く流通することを得ば教育上得益する所甚だ多からむ蓋しは同感の士相携へて來集り以て相互の交情を温め併せて斯道に裨益あらしめ本會の希望をして終始あらしめんことを

◎學者に寄語す

近來コレラ病の流行は大に減じられども之に反して赤痢病は年々増加し慘害を極む、幾万の生靈之が爲に斃るゝのみならず、經濟上の損失も亦莫大なり、脚氣病亦年々猖獗を究め、此病に惱まざるゝ者は猶一層の多數なり、唯其害や赤痢の如く慘劇ならざれば目立たざるのみ、肺病亦順次に蔓延の傾あり、是等皆恐るべき病症一日も速かに預防法の講究せられん事醫學社會に向て至囑に堪へざる所なり、是等或は已に潜心研究に従事する人もあるべし、茲に新に理學工學社會に向て注文し度海嘯の研究之れなり、地震には已に學會もあり専門學者もあり、觀測もせらるゝ、其何程の進程に達せるやを知らずと雖も兎に角研究に従事しあがら、効果の擧否は致方なし、惟り地震と其害伯仲の外にある海嘯に至ては未だその研究に従事する者あるを聞かざるは、遺憾の大なるものにあらずや、余輩は海嘯専門學者の出でん事は勿論其研究會の開設あらん事を切望す

◎哲學雜誌記者の實際論

近刊の「哲學雜誌」雜報欄内探求的精神と實踐的精神と題し、就中政治と宗教、との關係にの精神を發揮し(三)遊學子弟をして遊學の實を擧げ因て以て在國子弟の精神を興奮する一個の家庭を組成せんとするにありと、都下幾萬の學生が多く其方針を誤るは主として監督の方法其宜きを得ざるにあり、東北學生合宿所設立の如きは目下焦眉の急にして善良なる方法と適當の監督とを以てせば其目的を達し効果を收むるのみならず父兄をして大に其意を安せしむるに至らむ

雜 錄

西藏通信

左の一篇は、多年の宿志を齎らして、本法の爲め西藏探險の途に上られたる能見寛君が南條文雄師の下に送られたる消息なり、乃ち本欄に收めて之を紹介す

拜啓五月十二日夜御認め、御書面重慶領事館より打箭戸より轉送相成候處已に小生出立後にて炳城軍糧府の手を経て裏塘を越へ炳城より一千一百四十清里の内地なる當巴塘に於て去る十三日朝巴塘軍糧府官武氏に而晤の節正に落手拜見仕候貴信と共に國元及重慶、打箭戸よりの五池の書面を得日本、重慶等の事情を承知し心中非常に愉快を感候又小生在裏塘中は本山より昨年十二月送付相成候御本尊二百代二箱並に御藏版三部妙典二部八巻受取、炳西は全く西藏の域にて如此小荷物書而等達しかたき僻地にも拘らず二度迄荷物及書面落手致し實に珍敷事に存候
小生打箭戸出立後六日里程なる「河口」又「中渡」地より七月十四日一寸書面差上申置候間定めて御覽被成下候事と

奉存候其後七月十五日河口發雅龍江を液り四十里麻蓋宗泊
 十六日大山を越へ剪子灣二探浪工戸を經八十里にて西俄落泊
 餘月十七日塊烏拉の爲め一日滞在十八日一山を越へ五十里哨
 馬拉洞宿三十九日大牧山を越へ黑張房二十余戸牧羊羊數千を
 見六十里火竹卡宿二十日一山を越へ曠野に出て六十里にし
 て裏塘着裏塘には大刺麻寺あり一城廓をなし周圍十二三丁城
 内刺麻三千六百城門外より百戸斗りの平屋ある漢蠻混交雜居
 地有之其間に軍糧府副府、駐裏塘專用部廳及荒敗せる
 關帝廟あり遙下に裏塘營官正副土司官宅あり建築殆ど東京の
 各區にある郵便電信局の風有之候裏塘は非常の平地にして周
 圍三里帝と稱し東西凡そ二三里南北凡そ四五里裏塘は其平
 原の東北隅にあり其平原には田畠少しも無之幾千の牧牛馬羊
 等を放ち見事に御座候裏塘人家凡そ三百餘戸我々は烏拉を得
 る事の延引の爲め十四日間滞在致候現にゴルカ(即尼波爾)
 使節(北京へ朝貢の爲め光緒十九年本國發昨廿四年打箭炳着
 裏塘にて太烏拉をまつと三ヶ月)は三ヶ月間滞在小生等もゴ
 ルカ人と談話致候處西洋の風に能く似文字は梵字の頭首無之
 ものにして又梵字を解し候一行六十餘名の内途上死亡廿餘名
 今は三十餘名外に支那人數十人馱牛五百頭騎馬凡そ一二百非
 常の大勢に御座候漸く八月三日烏拉を得ゴルカ一行と同道出
 發里楚河落橋の爲め牛皮船に渡り馬は泳ぎ渡り候處馱子は淺
 瀬を渡り荷物濕り過半の法衣和洋書日記帳物品等濕り而も濕
 りたるを悟らざると十餘日爲にカビワキ非常に困り候六十
 里にして頭塘宿二ゴルカ一行と同道の爲め宿所無之「テント」
 を借り宿し候處夜は降雨又朝は降霜深く「テント」は一塊と

氷結致候此夜張房三十餘戸山間の原野一夜の都會と變じ候。
 四日火山岩山を越へ乾海子一虎皮溝等を經拉爾三宿。五日
 朝降雪綿をチラスが如く山上四五寸平地一寸積雪實に珍敷事
 に御座候山間を下る三十里刺麻丁四宿。六日塊烏拉の爲め
 一は滞在此地方裏塘と同様人氣非常に惡敷御座候。七日一山
 を越へ大雪山の麓より南フモト二郎灣に至り泊爾爾略一行と
 同道の爲め毎日宿所無之爲に「テント」一ツ買ひ求め其中に宿
 し候。八日河に沿て上る平坡六十里三巴に至り大雪山の西麓
 に張房宿す此日ゴルカ一行の馬牛七百餘頭土地の牧牛馬幾
 百、巴塘より來れる牛馬隊幾百三面より一時に合し一時は非
 常の混雜致候。九日大山を越へ九十里大所に至り張房宿此夜
 賊來り笠等の品物を盜去り又我々の烏拉ある馬一頭を盜み去
 り爲に半代價を拂はされ非常に迷惑致候。十日朝不得止一馬
 を雇添へ二ヶ馱子二馱にて發し大山を越へ候處噴火口と見ゆ
 る所多く有之亦小湖澤山有之非常に險阻に御座候山を上り四
 十里又下る四十里奔察木四又下る四十里小巴冲三に至り
 宿。十一日又下る四十里午前十時半當巴塘に着仕候、巴塘は
 四面山を以て圍み平地凡そ十五丁四角金沙江に至る三十清里
 人家三百餘戸軍糧府、都關府、專用部廳、正副土司官、大刺
 麻寺有之僧一千八百又佛國天主會堂あり外人二名滞在致候是
 を最内地の教會堂と致候物産には青稞、青菜、クルミ、梅桃松
 茸甲魚等有之田畠能く開け候米は十日里程の雲南地方より來
 り候由人氣裏塘に比し少し宜敷様見受られ候小間物は殆ど
 無之只數戸の鋪子有之のみにて而も非常に高價に御座候、軍
 糧府官に面談護照を示し入藏に付護送兵一名を給せらる、由

被申候未九烏拉無之出立の期未定に御座候矢張ゴルカ一行も
 滞在致居候今後は多分發信致事六ヶ敷事と存候(下畧)
 過日井土川大尉歸朝に際し打箭戸より送り置候小包の中に拉
 薩傳來の小部の經文十餘部入れ置候他日御覽被下候事を得ば
 幸に御座候其他申上度事多々有之候得共暫くの御暇申上候尙
 辱知法兄へ宜敷御傳聲奉願上候早々頓首
 明治卅二年八月十五日

清國四川内地西藏境巴塘旅宿にて
 能 海 寬

南條文雄尊師 座下
 別封西藏經文の見本として二葉相添送り申候共に藏文に御座候異跡に御座
 候右ニラコ寺の塔中ヨスタラタルチ拾ひたるにて泥にヨコレ居候只参考見
 本迄に相送申候

信 界 近角常觀

靜觀錄 (十五) 信念の修養は實際問題に如くは無し
 信仰は活物なれば時々刻々進歩すべきものであり乍ら、兎角
 沈滞に陥り安き弊がある、全体信仰と云へば内心の中に慥か
 に攫んだ心持がなければならぬ、所で其攫んだ心持がする
 と、忽ち、是で十分であると腰を掛けるのである、夫故直ぐ
 に沈滞に陥り安い、攫んだ様な心持がしたのには、畢竟漸く信
 仰の闕をまたきて、門内の微光を認めればかりで、夫から大
 に信念の修養を勉むべきである、私の経験によるに一つ不審
 な點ありて疑團氷解せざるとき、時機來りて煥然として明ら

かになることがある、すると直ちに我は眞髓を得た、極致に
 達したと心得る、是が抑々懈怠のものである、是は信念の修
 養に最も戒むべき點である、全体信仰は恰も池を掘る如く幾
 重とも知れぬ底がある、一つ底に達したからとて夫で十分と
 思ふてはならぬ、其底を破りて行くときは又大に進むべき余
 地がある、暫くすると又第二の底がある、すると再び又十分
 であるかと考へて歩を止める、又歩を止めるも無理ではない、
 底に達する毎に、相應に水が出てくるのである、所謂徹底し
 た心持かするのである、門より進みて戸口まで行くときは確
 かに一層明るくなるのである、即ち益々佛陀の光明が明らか
 に拜まれる様になつてくるのである、其時躍り上がる喜があ
 る、うこで兎角尻を落ち付ける、されど本人は決して尻を落
 ち付けて居ることは自覺出來ぬ、本人は進歩して居る氣持で、
 寧ろ得意である、借此得意な所が大に戒むべきである、借愈
 時機來りて戸口より玄關まで上りてから顧みれば、決して進
 歩して居つたのではない、唯門と戸口の間のみならず、唯反
 同し道を往つたり來たりして、楽しんで居つたのである、唯反
 覆して居つたのを進んで居ると思ふて居つたのである、第二
 の底に達したときは、已前の第一の底に較ぶれば頗る深いと
 思ふて其水に満足して居つたのである、かく信仰には破りて
 進まねばならぬ無限の底がある、信仰の奥に達して直接に佛
 陀の光明に接觸するまでには、堂もあれば、室もあり、無
 限の居間を過ぎ越さねばならぬ、現に禪の経験にも大悟十八
 遍、小悟其數を知らずとあるでないか、又眞宗の安心にも三

願轉入と云ふことがあるではないか、三願轉入であるから三遍であると思ふたら大間違である、實は無限の轉入である、信念の修養と云ふは、漸々此底を破りて進んで行くことである、所が如何にして此底を破るかを考へねばならぬ、若し大に進むべき余地があることを自覺すれば尻を落ち付ける筈はなけれども、自分が其境界に居れば自覺出来ぬのである、白狀すれば私の如きは決して尻を落ち付けてならぬとは知り乍ら、常に尻を落付けがちである、初めて氣が付きて進んでからでなくては尻を落付けて居つたことが分らない、然らば如何にして大に進むべき余地あることを知るべきか即ち信念の修養は如何にしてなすべきであるかと云ふ問題である、實地私の経験を云へば、靜坐念を凝らして佛陀の膝下に跪き、大光明に接觸する心持をなし又終日行動云爲せし跡を顧み、又心中に描き出だした妄念を思ひ浮べて、心の底から慚愧の感に打たる、も慚愧に修養の方法である、是は成るべく常行として行ひたいと思ふて居る、去れど其心中に於て接する佛陀の光明が免角其時の信仰の程度に應ずるだけしか拜せられ、慚愧の心を振ひ起した瞬間は如何にも心が洗はれた心持はすれども、夫が止めは元の俗界に立歸つた氣持になる、此は慚愧に底から底まで進む方法ではあるが底を破るには力が弱い、次に信仰の内的経験を慚愧に修養の方法である、是は最も愉快な方法である、恰も諸國の人々か同じく都へ上りて一夕燈下に相會して、各道中話をする様なるもので、一人々々経験が異なるゆへ、最も興味が深い、特に各眞摯の情を

念し敬虔の念を運んでくれれば一坐融合する心持がする又自己よりも一歩進んだ人の経験を聞くときは、たしかに大に進むべき余地あることを發明することもある、されど實地を云へば自己よりも進んで居ると云ふことを察することは頗る難い、故に多くは今迄過ぎて来た道を反覆する事か主にありて底を破りて進むには弱い、前途に輝ける希望の光明を目掛け勇進すると云ふよりも、寧ろ後を顧みて過さず山川を眺めて居る様な心持がする、然らば如何にして信念を練り上ぐべきか、如何なる方法にて底を破りて進むべきかを講せねばならぬ

全体行くべき所まで往かずには満足して居るのであるゆへ、一歩でも進んで居る人より眺めてみれば先方では歴々我不十分なことが分かるに違ひない、故に此の如き進んだ人より打撃を蒙るがよい、全体我か満足して居るが病根である、故に非常に鞭撻を要するのである、此の如き場合に遭遇するときは如何にも我が高慢の頂に上りて居つたことが自覺出来て、滿身懺悔の念に堪へがたく、心中深くわやまり果て、佛陀か我信仰を増進せんが爲めに、特にかく我を戒め玉ふのであると思ひ、感謝の念と共に熾しく猛進する様になる、生きた人に接しても又書物をもつても此の如きことはあるされど人はしぶといものである、一旦は起つても居ても身の置き所なき程に思つても、忽ち平氣になり安い、私の経験によるに最も信念の修養に適切であるは實際問題に接觸した場合である、抑々自分が未熟の信仰の程度に應ずるだけの光明で満足して居る

のは、畢竟自分の心中に限なく光明か透徹して居らぬことを自覺せぬからである、所が實際問題に臨み手を下すときに當りては、其光明か透徹して居らぬことが事實上顯はれはれどす、即信仰が未熟なる已上は未だ光明の到らぬ暗き點がある、人にも云ひ難き汚き心がある、彼の靜坐念を凝らして慚愧するときは唯汚き心を心中で否定するのみであるから、心安く否定することが出来る代りには忽ち又頭を擡げてくる、所が實際問題に接して實行上にはあらはるべきは右にするか左にするかで黑白清濁の分れ目とある、此時は汚き心が種々の口實を作り、種々の誘惑を具へて、我を逢迎する、此時一歩も許してはならぬ、かくするが通常世間の當然である杯と考へて汚き方に傾きてはならぬ滿身佛陀の靈光を仰ぎて斷乎として底を破りて深く入り込み薄暗き室より明るき室に入ることが出来る、かく實際問題につき當りて進んだ道は決して跡もどらせぬ、一旦實行にあらはした己上は釘を以て打ち付けた様なものである、再び此の如き場合に遇ふも何の苦痛もなく平氣で處理することが出来る、かく實際問題に接觸して、一點でも佛陀光明の到らぬ點がないかを調べるが最も適切なる信念の修養である、若し一點にても暗き點あらば自力が残りて居るのである、眞實佛陀の大光明に直接に交はらないのである徹頭徹尾滿身佛陀の命令の下に意志が働かないのである

合 音

奥村五百子傳(六)

秦 敏 之

さて五百子は主義の爲に、兄圓心の許へ刺客を送るべき不幸ある場合に至りたれども、幸ひに圓心は何れへか其影を隠して出て来らず、今は己れの働作を直接に妨害するものもあらざれば、専ら銃砲製造に意を注ぎ、いざといはれ打て出てん覺悟を極めたり、然るに當時長崎縣令北島某なるもの、早くも五百子等の舉動を察し、其爆發を防がんが爲に徐ろに五百子に説いてへるやう、若し西郷にして久留米まで押寄せ来りたらんには、最早万事は貴意のまゝなるべし、さりながら西郷の久留米に至らざらん間は、たどひ砲を鑄くとも丸を込めたまふべからずとて、甘くも五百子をすゝめれば五百子も女子の事とてさすがに情誼にほだされて躊躇しけるに、西郷の勢は漸次に衰へて、城山の戦に空しく逆賊の名残を留めて失せにければ、五百子は遂に戰場に至らずして、失意の境遇に陥り、兄圓心には勘當せられて其家に至ることを許されず、家産は擧げて大砲鑄造の資に投じられたれば一時の困難は云はん方なかりし、然るに間もなく五百子の兄圓心は岩倉公より朝鮮出張を命せられたれば、奥村家の親戚知人等は大に兄妹の不和を慨きこの度こそは和睦すべしとて痛くすゝめられつるまゝに、さすがに兄妹の情禁じ難く半年ぶりの再會、坐るに喜びの涙を打催しぬ

樹德會 千葉に於ける第一高等學校醫學部に於ける同會... 四恩瓜生會 本年六月盛大なる發會式を擧げたる瓜生...

大谷派北陸聯合會 去る七日金澤別院に於て... 加賀國同盟會の近況 該會は慈善事業の第一着手と...

加賀國同盟會の近況 該會は慈善事業の第一着手と... 一時々相談會を開き評議實行の方法を各地に通知する事...

石川縣の免囚保護を創立せり 去月八日同市出張中なる... 名盛會を起す 去月十七日評議員會に附せりと云ふ...

第一條 名稱 本會は四恩瓜生會と稱す... 第二條 主義目的 佛陀の聖教によりて各自の信念を確立し...

播州と公認問題 去七日京都公認教制度期成同盟... 午後二時より演説會を開き...

寄贈書目 眞宗通鑑(土屋詮教著) 東京 眞宗通鑑(土屋詮教著) 東京... 佛敎聖典史論(梯崎正治著) 東京...

東京 眞宗通鑑(土屋詮教著) 東京 眞宗通鑑(土屋詮教著) 東京... 佛敎聖典史論(梯崎正治著) 東京...

廣 告

耶蘇教非公認論

特別減價郵稅共 金拾錢

申込所

大日本佛教徒同盟出版部

臨時看病婦募集

貸費生貳拾名を限り入校を許す

修學中食費其他諸雜費を貸與す

貸費は卒業の上給料の中より還納せしむ

年齢は十八年以上三十年以下とす

修學年限は十五ヶ月とす

志願者は至急申出らるへし

京都市上京區姉小路通堺町西入

京華看病婦學校

(明治三十一年十二月二十六日通信省認可)

政教時報第二十號目次

社説 宗教制度を確立せんには教義儀式の點に着眼を要す

論説 公法人の意義

社會 宗教用建物の市税免除 主張なき言論等

雜錄 久我侯爵北堂を吊する文 ●雲水雜記(一)

今昔 奥村五百子傳(五)

會報 各地の景況

本誌廣告

一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす

一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず

一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事

一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳錢五厘	金五錢	金參拾錢	金六拾錢	無遞送料
●廣告料五號活字一行(二十七字語)一回金拾錢				國

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事

一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十二年十月卅一日印刷 發行兼編輯人 上村幸三郎
明治三十二年十一月二日發行 印刷人 清水朝太郎